

令和5年度病害虫発生予報第2号

令和5年4月26日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	苗立枯病	—	平年並
		ばか苗病（育苗期）	—	平年並
		イネミズゾウムシ	平坦～中間地： やや早い 山間地： やや遅い	平年並
果樹	ナシ	黒斑病	やや早い	平年並
		黒星病	やや早い	やや多い
		赤星病	やや早い	平年並
		ハダニ類	やや早い	平年並
		アブラムシ類	やや早い	平年並
		カメムシ類	やや早い	平年並
	カキ	灰色かび病	やや早い	平年並～ やや多い
		樹幹害虫 (ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ)	やや早い	平年並
	ブドウ	灰色かび病	やや早い	平年並～ やや多い
		べと病	やや早い	平年並～ やや多い
野菜	ネギ	べと病	平年並	やや多い
		さび病	—	やや多い
		ネギアザミウマ	平年並	やや多い
		ネギハモグリバエ	やや早い	やや多い
	ラッキョウ	ネギハモグリバエ	やや早い	やや多い
	スイカ	菌核病	平年並	やや多い
		つる枯病	平年並	平年並
		うどんこ病	平年並	平年並
	スイカ・メロン	アブラムシ類	やや早い	平年並
		ハダニ類	平年並	平年並

気象予報（抜粋）

1 か月予報（4月22日～5月21日：4月20日、広島地方気象台発表）

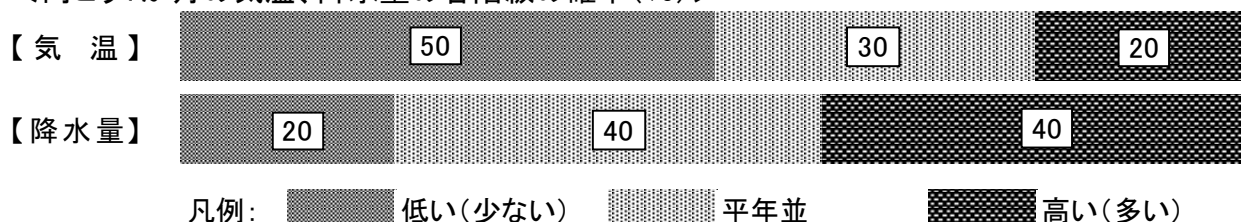
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

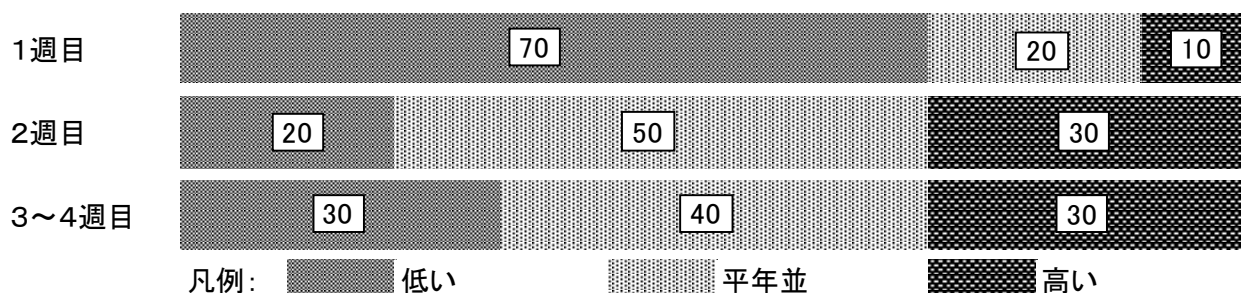
向こう1か月の平均気温は、低い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率70%です。2週目は、平年並の確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イネ]

1 苗立枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 苗立枯病の予防防除が広く普及している。
- イ 向こう1か月の気象予報から発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病後の防除は困難であるため、予防防除を徹底する。
- イ 育苗環境を清潔に保ち、育苗中の温度管理及び水管理に注意する。
- ウ リゾープス属菌による苗立枯病が発生した場合には、発病部分の回復は見込めないが、緑化期(但し、は種14日後まで)までであれば、発見後直ちにダコニール1000（使用回数は2回以内）の500～1,000倍液等をかん注することにより、まん延を防止できる。
- エ ムレ苗が発生した場合には、タチガレエースM液剤（育苗箱へのかん注は1回以内）の500～1,000倍液又はタチガレン液剤（育苗箱へのかん注は2回以内、ただしタチガレエースM液剤等のヒドロキシイソキサゾールを含

む剤を使用した場合は1回以内)の500～1,000倍液を、1箱当たり0.5Lかん注し、夜間の保温と昼間の遮光に努め、苗の回復を図る。移植可能であれば、早めに本田に移植する。

2 ばか苗病(育苗期)

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

前年の本病の発生は平年並であったため、本年用種子の保菌率は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 温湯種子消毒については、浸漬時間、温度などを厳守する。消毒後の種子を保管する場合には、種子を十分に乾燥させ、清潔な冷暗所に保管する。浸種時には、必ず水道水を使用し、適宜、水の交換を行う。

イ 薬剤による種子消毒(低濃度長時間浸漬)については、以下のことに十分注意して行う。浸漬処理時の薬液量の不足あるいは低温時の処理で効果が低下するため、十分な薬液量を確保し、液温は10℃以上を確保する。消毒後の浸種は停滞水中で行い、水の交換は原則として行わないが、水温が高い場合など酸素不足になるおそれがあるときは静かに換水する。なお、薬剤については、病害虫防除指針などを参考にする。

3 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生時期 やや早い(平坦～中間地)

やや遅い(山間地)

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月20日現在、本種の飛翔に必要な有効温度の積算値は平坦～中間地で平年に比べてやや多く、山間地で平年に比べてやや少ない。さらに、向こう1か月の気象予報から、発生時期は中～平坦地でやや早く、山間地で平年に比べてやや遅くなるものと予想される。

イ 前年の第1世代成虫の予察灯への誘殺数は平年並であった。

(3) 防除上注意すべき事項

育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守り、1箱ずつ丁寧に薬剤を施用する。特に1箱当たりの施用量が不足すると、著しく防除効果が低下するので注意する。なお、薬剤については、病害虫防除指針などを参考にする。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（園芸試験場）における4月中旬までの孢子飛散量は、概ね平年並で推移した。

イ 令和4年11～12月に行った越冬菌密度調査の結果、短果枝の病芽率及び一年枝上の病斑数は平年並、病枝率は平年に比べて低かった。

ウ ナシの生育は平年に比べて早い。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 小袋掛け終了までの薬剤散布の間隔は5～7日程度とし、特に小袋掛け直前の防除を徹底する。

イ 薬剤は、摘果期にベルコートフロアブル1，500倍液、ユニックス顆粒水和剤47の1，500倍液などを、小袋かけ中に有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍とポリオキシシンAL水和剤1，500倍の混用液、ポリバリン水和剤1，500倍液などを散布する。

ウ スピードスプレーヤによる防除を実施する園では、往復走行又は縦横走行を行い、散布むらを小さくする。

エ 雌しべ感染を防ぐため、摘果する際はできる限り雌しべを取り除く。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（園芸試験場）において、4月上旬の孢子飛散量は平年並～平年に比べてやや多い傾向で推移した。

イ 令和5年1～2月に行った越冬菌密度調査の結果、腋花芽の病芽率は平年に比べてやや低かったが、今年の発生量から越冬伝染源である罹病落葉の量はやや多いと見込まれる。

ウ ナシの生育は平年に比べて早く、子嚢孢子飛散量の増加時期は例年に比べてやや早い。

エ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 感染源となる果そう基部病斑、発病葉及び果実は見つけ次第切除し、園外で処分する。

イ 薬剤は、ファンタジスタ顆粒水和剤4，000倍液、ユニックス顆粒水和剤47の2，000倍液、チウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックスフロアブル）500倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍液、ベルコートフロアブル1，500倍液などを散布する。

ウ 多発後の薬剤散布は十分な薬効が期待できないばかりでなく、耐性菌発達のリスクを高めるため、予防散布に努める。また、耕種的防除により初期密度の低減を図る。

3 赤星病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（園芸試験場）において、冬孢子堆の成熟度は4月上旬に100%となり、成熟時期は例年に比べてやや早い。

イ ナシの生育は平年に比べて早い。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

例年発生の多い園又は初期病斑が多く認められた園では、4月下旬頃にDMI剤（アンビルフロアブル1，500倍液、スコア顆粒水和剤4，000倍液など）を追加散布する。ただし、耐性リスク管理の観点でDMI剤の使用回数（年2～3回まで、他系統の薬剤との混用又は混合剤での使用）に注意する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県内巡回調査園におけるハダニ類の越冬量は、一部地点でやや多かったものの、全体としては平年並であった。

イ ナシの生育は平年に比べて早い。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ハダニ類の発生が認められた場合は、カネマイトフロアブル1，500倍液などを単用で散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（園芸試験場、殺虫剤無散布体系）におけるユキヤナギアブラムシの発生は、平年に比べて早い4月第4半旬（平年：5月第1半旬）に認められた。

イ ナシの生育は平年に比べて早い。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、アブラムシ類の第1回目の発生盛期は平年に比べてやや早い5月下旬頃で、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア アブラムシ類の発生が多く認められるナシ園では、アドマイヤーフロアブル5，000倍液又はウララDF4，000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーフロアブルなどのネオニコチノイド系殺虫剤の使用にあたっては、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、最小限の使用とする。

6 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア クサギカメムシの越冬成虫数（ベニヤ板トラップ、県内10地点調査）は、トラップ当たり4.4頭（平年：8.0頭）と平年に比べて少なかった。

イ 県予察ほ場（園芸試験場）の集合フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの誘殺は、平年に比べてやや早い4月第4半旬（平年：4月第5半旬）に認められた。

ウ ナシの生育は平年に比べて早い。

エ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、春季におけるナシ園への成虫の飛来時期は、平年に比べてやや早い4月下旬頃で、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 山間地及び民家近くの果樹園で例年発生が認められる園では、春期の被害が予想されるため、成虫の飛来を注意して観察する。

イ 例年カメムシ類の発生が多い園では、4月以降、定期的にはほ場を見回るなどして、春先の発生量の把握に努める。

ウ 摘果期～小袋掛け期の幼果を加害するので、この時期に果樹園への飛来が認められた場合、直ちにジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）2,000倍液などを追加散布する。

[カキ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 平年並～やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、県予察ほ場（河原試験地）において本病の発生は認められていない。

イ 昨年の発生量は平年並であり、越冬伝染源量も平年並と見込まれる。

ウ カキの生育は平年に比べて早い。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並～やや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病原菌は低温・多湿条件を好むため、天候不順が続くと本病が発生しやすい。また、強風などによって若葉が傷ついた場合に突発的に発生しやすい。

イ 西条、伊豆などの品種では、本病の発生が多い傾向である。

ウ 降霜により霜害を受けたほ場では、本病の発生に注意し、防除対策を徹底する。

エ 防除薬剤は、フルピカフロアブル3,000倍液、ゲッター水和剤1,500倍液又はオンリーワンフロアブル2,000倍液などを散布する。

2 樹幹害虫（ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ）

（1）予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 昨年の樹幹害虫の被害量は平年並であり、越冬量は平年並と見込まれる。

イ カキの生育は平年に比べて早い。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、越冬世代成虫の発生は、平年に比べてやや早い4月下旬頃から始まると予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 防除は幼虫の食入防止を目的に、第1世代幼虫の発生時期である4～5月を目安に1回目の薬剤処理を行う。

イ 薬剤はフェニックスフロアブル200倍液（使用時期は開花期まで）又はガットサイドSの1.5倍液を樹幹害虫の被害が多い部位（樹幹部や枝基部）を中心に処理する。

[ブドウ]

1 灰色かび病

（1）予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並～やや多い

（2）予報の根拠

ア 4月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）における本病の発生は認められていない。

イ ブドウの生育は平年に比べて早い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並～やや多いと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 病原菌は低温・多湿条件を好むため、開花期が天候不順になると、本病が発生しやすい。

イ 薬剤はパスワード顆粒水和剤1,500倍液、スイッチ顆粒水和剤3,000倍液、ゲッター水和剤1,500倍液、ポリベリン水和剤1,000倍液、ロブラールくん煙剤100g/くん煙室容積300～400m³（高さ2m、床面積150～200m²）などを使用する。

ウ 施設栽培では多湿条件が続くと発病が増加するので、早朝に換気を行って施設内の湿度を下げる。

2 ベと病

（1）予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並～やや多い

（2）予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であり、越冬伝染源となる罹病落葉の量も平年並と見込まれる。

イ 4月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）における本病の発生は認められていない。

ウ ブドウの生育は平年に比べて早い。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並～やや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 開花期以降の天候不順は、本病の発生を助長するので注意する。

イ 薬剤は、落花後（小豆大）にアミスター10フロアブル1，000倍液、ストロビードライフフロアブル2，000倍液又はベトファイター顆粒水和剤3，000倍液などを使用する。

ウ 発病果及び発病葉は見つけ次第切除し、園外で処分する。

野 菜

[ネギ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、県西部の現地調査ほ場において、本病の発生量は平年並である。

イ 本病は、15～20℃程度で降雨が続くと急激に発病が増加する。これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後のまん延が早いため、発病前からの防除に努める。

イ マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤600倍液、ペンコゼブフロアブル500～600倍液など）、ランマンフロアブル2，000倍液、アリエッティ水和剤800倍液、ダイナモ顆粒水和剤2，000倍液、ピシロックフロアブル1，000倍液などを予防散布する。

ウ 発病を認めたら直ちに、リドミルゴールドMZ1，000倍液、フォリオゴールド800～1，000倍液、レーバスフロアブル2，000倍液、プロポーズ顆粒水和剤1，000倍液、メジャーフロアブル2，000倍液、フェスティバルC水和剤1，000倍液、シグナムWDG1，500倍、ザンプロDMフロアブル1，500～2，000倍液、カーニバル水和剤1，000倍液などを散布する。

エ 同一成分を含む薬剤は連用しない。また、成分ごとの総使用回数に注意して薬剤を選定する。

2 さび病

(1) 予報の内容

発生量	やや多い
-----	------

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 春期が比較的低温で、降雨が多いと発生量が多くなる。これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 被害葉等は伝染源となるので、ほ場の近くに放置しない。

イ 発病後の散布は効果が劣るため、予防散布に重点をおく。発病前や発病初期には7～10日間隔でマンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤600倍液、ペンコゼブフロアブル500～600倍液など）、ベルコート水和剤2,000倍液、ラリー水和剤2,000倍液、メジャーフロアブル2,000倍液、カリグリーン800倍液などを散布する。

ウ 既に多発しているほ場では、アミスター20フロアブル2,000倍液、ストロビーフロアブル2,000倍液、カナメフロアブル4,000～8,000倍液、カーニバル水和剤1,000倍液、オンリーワンフロアブル1,000倍液、あるいはオンリーワンフロアブル1,000倍液にカリグリーンを800倍液で混用して散布する。

3 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、ネギアザミウマの発生時期、発生量ともに平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期後半から定植当日に使用する剤は、病害虫防除指針や各地区の防除暦を参考にする。

イ 本ぼ生育中のネギに対しては、アニキ乳剤1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液、トクチオン乳剤1,000倍液などを散布する。

4 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、ネギハモグリバエの発生時期はやや早く、発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期後半から定植当日に使用する剤は、病害虫防除指針や各地区の防除暦を参考にする。

イ 本ぼ生育中のネギに対しては、アニキ乳剤1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液、ヨーバルフロアブル2,500～5,000倍液などを散布する。

[ラッキョウ]

1 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、ネギハモグリバエの発生時期はやや早く、発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤はビリーブ水和剤1，500倍液、プレバソフロアブル5の2，000倍液などを散布する。

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、気温15～20℃程度で多湿条件が続くと発病が増加する。向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。マルチ上に溜まった水は適宜、穴を開けて排水する。また、咲き終わった花卉は発病しやすいので、摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1，000倍液、カンタストライフフロアブル1，000～1，500倍液、セイビアーフロアブル20の1，000倍液、スクレアフロアブル2，000倍液、ロブラール水和剤1，000倍液、パレード20フロアブル2，000～4，000倍液などを散布する。

ウ 曇雨天が続く場合は、ハウスではスミレックスくん煙顆粒6g/100m³(床面積50m²×高さ2m)、ロブラールくん煙剤100g/300～400m³(高さ2m、床面積150～200m²)などを使用する。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は降雨や過湿で発病が増加する。向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。

イ 本病は株元を中心に発病が始まるので、株元にも薬液が十分かかるように散布を行う。薬剤は、ジマンダイセン水和剤600倍液、アントラコール顆粒水和剤400～600倍液、ダコニール1000の700～1，000倍液などを散布する。

3 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、25℃前後の気温と適度な湿度で発病が増加する。向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は、収穫期の草勢低下により発生量が増加する。蔓延後の散布は、防除効果が劣るため、発生前からの防除を徹底する。

イ 発生前には、ベルコート水和剤1,000倍液、イオウフロアブル500倍液、トリフミン水和剤3,000倍液などを散布する。

ウ 発生初期のほ場では、カリグリーン800倍液、ショウチノスケフロアブル2,000倍液などを散布する。

[スイカ・メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、アブラムシ類の発生時期はやや早く、発生量は平年並である。

イ 4月第3半旬現在、県予察ほ場（園芸試験場露地ほ場）における黄色水盤トラップへの飛来量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には防虫ネット被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 葉裏を注意して観察し、初期防除を徹底する。

ウ スイカのハウス栽培では、交配前にはチェス顆粒水和剤5,000倍液などのミツバチへの影響のない薬剤を散布する。

エ スイカのトンネル栽培では、つる引き誘引時期にチェス顆粒水和剤5,000倍液、交配前にモスピラン顆粒水溶剤2,000倍液などを散布する。

オ メロンでは、チェス顆粒水和剤5,000倍液、バリアード顆粒水和剤4,000倍、モスピラン顆粒水溶剤8,000倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場においてハダニ類の発生は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ハウスなどで発生初期には、スイカ、メロンともにバロックフロアブル

2,000倍液、ダニサラバフロアブル1,000倍液などを散布する。多発した場合はコロマイト乳剤1,000倍液、マイトコーネフロアブル1,000倍液などを散布する。

[お知らせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、農林水産省の「農薬登録情報提供システム」から検索できます (<https://pesticide.maff.go.jp/>)。

なお、農薬の使用や防除指導等には、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnp.ne.jp/tottori/>



ホームページ2次元コード

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類など）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、御利用ください。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

（電話：0857-53-1345、電子メール：boujyot@titan.ocn.ne.jp）

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

（電話：0857-53-0721、ファクシミリ：0857-53-0723）

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

（電話：0858-37-4211、ファクシミリ：0858-37-4822）

※次回、予報第3号の発表は5月17日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますので、御注意ください。